

「羅生門」

芥川龍之介

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や採烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とか云う災いがつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がいたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨て顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

「以下の要約…下人は、やむなく羅生門の上で夜を過ごすことになった。夜の闇の中、人の気配がする。よく見ると、一人の老婆が、死人の頭から髪を引きぬいているではないか。」

「ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。…(中略)…今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃやて、仕方がなくする事じゃわいの。」

…(中略)…
これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。…(中略)…

「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。

「羅生門」というと、黒澤明の映画を思い出す方も多いと思う。けれども、あの映画は同じ芥川の「藪の中」という作品を筋立てにしている。羅生門は単に場所の設定を借りているだけである。ただ、羅生門というところの映画のおどろ景色をすぐ想像してしまふのは、筆者だけではないと思う。

芥川の「羅生門」が書かれたのは、芥川が大学二年生の時で、夏目漱石に激賞された「鼻」という作品と同時期であった(大正四〜五年)。

話そのものは、「今昔物語」第二十九巻の「羅城門登上層見死人盗人語第十八」を基に、巻三十一「太刀帯陣売魚姫語第三十一」の内容を一部に交える形で書かれたもの。と言われているが、古い物語に近代人の自我や悩みといった新しい内容を込めた傑作として評価された。

芥川の親友であった久米正雄の「鼻」についての解説が、この作品にも当てはまるようだ。

「あれの裏に『意味』があるわけではなく、一言一句読んであの作品に当たればいいと思います。(中略)実に手際よくある意味で刻苦精勵して、一言一句むだなく、過不足なく表現した最もいい例だと思います」
人生の深みや思想にはかわらず、人間の一面だけに焦点を絞り、鋭い鑿で削り取つたように描く才知は、しかし、三十五年四カ月余で、服毒自殺によって幕を閉じた。

時代は、戦争に向けてまっしぐらに進んでおり、その暗さが芥川の死の中にも反映していたのかも知れない。